

イタリア語教育における日本人学生のコミュニケーション能力、ヒアリング能力の向上と学習意欲の持続に関する報告

Didattica della lingua con la focalizzazione sullo sviluppo prioritario della capacità comunicativa ed ascoltativa degli studenti giapponesi ed aiutare a sviluppare il loro potenziale entusiasmo

アナスタージャ・ブンドック
Vunduk 桑原 Anastazija

桑原恒和
Tsunekazu KUWAHARA

はじめに

第一章 複言語プログラムにおけるイタリア語の授業の目的と方法

第二章 複言語プログラムにおけるイタリア語各クラスの授業内容と解説の
要点

まとめ

“発見への本当の旅とは、それは新しい大地を探す事ではなく、新しい目を持つ事である”

(イタリアの格言)

はじめに

この報告書の筆者の一人である Vunduk 桑原 Anastazija は十五年程前に、日本で住み始めた。それは筆者の人生において初めて西洋社会以外で暮らす特別な体験であり、考え方や筆者自身のありようにおいても、全く新しい広がりを持たらすものとなった。それは今日までに至る、素晴らしい物語の始まりでもあるが、見渡せば、今でも外国人である筆者にとってはまだまだ多くの発見すべき事柄がある事も容易に分かる。例えば筆者が突然、筆者とは

違った理解をし、反応する人々に囲まれているという事実に気づく時などにそれは現れる。最初は、その度に戸惑いを覚えていたものだが、時間と共にそれはより深い異文化への理解へと取って変わって行った。筆者は少し幸運だったのか或いは運命として定められていたのか、それは筆者の育った環境自身がもうすでに多重文化の家庭だったという点である。筆者の母の家系はイタリア系（その故郷であるイストリア半島を含むバルカン半島のアドリア海沿岸部は第二次世界大戦終了時まで長い歴史を持つイタリア領であり、ローマン・カトリックの文化を持つ）、そして父の家系はギリシア系であり（東方正教会の文化を持つ）、二人ともスラブ文化圏である旧ユーゴスラヴィアで生まれ、育った。そして筆者がイタリアのフィレンツェ美術学院（アカデミア）の絵画科で学んでいた時、4年に渡るユーゴスラヴィアからの独立を標榜するクロアチア紛争が起き、このユーゴスラヴィアという国自身はそれまでの同国人同志がお互いの文化的背景の違いを理由に、おびただしい血を流しながら最終的には六つの国へと分裂した。この事から祖国の存在を失った筆者の中には一つの国籍を持つという強い意識は生まれえなかった。その為以前も、そして今でもどこかに所属しているような気持ちと、どこにも所属していないような気持ちを併せ持っている。そしてその紛争当時から、現在においても声高に自分の拠り所としてアイデンティティーを振りかざす人達を横目に見ながら、筆者にとっては国籍や文化、オリジンはとても重要なものであると理解しながらも、それは筆者という個人の存在自身においてのほんの一部分にしか過ぎず、これからも無限の広がりを吸収し続けようとする自分という存在とその姿勢自身の方を強く意識したいと筆者は願っている。そこで筆者が授業を担当する学生達には、授業の初日から他言語とその固有の文化を学び、理解するという事がその学生個人の成長へと直接つながる事や、中心点を一つに限った円ではなく、中心点を複数持った楕円のような活動範囲を持ち、国境を越えた英知を吸収出来る文化人になるという事がいかに人として豊かな事であるかを伝えて行く。

第一章 複言語プログラムにおけるイタリア語の授業の目的と方法

複言語プログラムにおけるイタリア語の授業の目的と方法、それは学生がイタリア語で考え、話せるようになる事と、そこまでに至る準備と環境であると言える。

一年程前、愛知県内の大学に一人のイタリア人留学生在が学んでいた。彼女は日本が大好きで、将来イタリア語の教員になる事を希望していた。そしてしばしば、彼女は筆者に対し、日本での学習方法とイタリアでの学習方法の違いについてを語り、筆者はいつも興味深くそれを聞いていた。彼女によると、日本の教育方法はどちらかと言うと授業内容を情報として知らされ、暗記する事こそが勉強であり、対してイタリアにおいてのそれはその内容や原因こそを理解し、学生達が意見を交わしながらそれを検証し、今度はそれぞれ個人の考えを深める事こそが勉強であるというものだった。実際、この事が彼女にとっていつもフラストレーションの素となっていたようであり、来る日も来る日も提示される授業内容に関して、余り踏み込んだ考察は行われないまま、ただ表層ばかりを事例のように暗記して行く事は彼女にとって容易ではなかったと言い、対して日本人学生達は毎回、独自の意見は持たないものの、僅か一二回程度教材を読んだだけでもその内容を覚えてしまう程、暗記する事には長けていたようだ。この話は筆者にイタリアでの学生時代の授業を思い出させ、とても考えさせられた。そこでこのイタリア式の教育方法の良い点（内容こそを検証し、各自の意見を持たせながら、それを発展させる事による学生個人の人的成長こそを重視するという姿勢）を如何にして日本の教育方法に合致させるかについて考え始めた。それは授業の目的として端的に言うところ「より日本人学生に思考させ、発表させる」と言うものとなった。

実際の授業方法について；やはり外国人である教員の存在をクラスに馴染ませる為にも筆者は授業開始の少なくとも10分前には教室で待機する。そして授業が時間の無駄無くスムーズに運べるよう、手の届く範囲に全ての教材や用具を配置し、ブラインドや照明そして空調も確認し「学ぶ環境」を整えた後、学生達とイタリア語でコンタクトをとるよう、いつも心掛ける。それ

はただ単に挨拶であったり、機嫌を伺ったり、或いは前回の授業に関する質問を受けたりする程度のものであるが、努めてシンプルなイタリア語で話しかけ、少しずつ学生達を1時間半もしくは3時間（2コマ連続クラス）、共に過ごす授業に向けて雰囲気や精神的にも準備させる為である。そして授業が始まり、今度は彼らの注意を一気に集める事へと集中する。筆者の経験から分かった事は、授業の最初の5分間が如何に重要な時間であるかという点だ。それはまず授業の最初から学生達のやる気をそぐような課題を避ける事であり、例えばそれは学生達のレベルに合わない、もしくは彼らの側からは準備出来ない、不意打ちのような会話演習を行ったり、或いはその日のノルマをこなす為の単調な文法解説の押し付けで始めたりする事などを指す事となる。そこで筆者は毎回、落語家が聴衆に語り始める「枕話」のように、この一週間内で起きた出来事や自身の近況、イタリアのニュースについてなどをイタリア語で話し、今度は学生達分かる範囲でそれに対して自由にコメントするようなやり取り（会話演習）で始めるようにしている。そしてそれが終わると筆者はその日の覚えるべき慣用句であるミニダイアログの例文を黒板に書き始める。このダイアログにはその回で学ぶ文法事項を含み、問いと答えのインタビュー形式なので演習中、学生達の間で何度も個人的な小さな情報を交換し合う事が可能となる。例えば補助動詞（もしくは従属動詞）の解説においては、動詞 *potere* と *sapere* の“出来る”という意味における違いについてを学生達に理解させる為には、以下のようなダイアログを用意する。

A; Cosa sai fare molto bene e puoi farlo adesso?

B; So disegnare molto bene, però adesso purtroppo non posso perché devo studiare l'italiano.

訳としては

A; 君は何を上手く出来るの（能力的）？そして今、それを出来る（実際的）？

B; 私はとても上手にデッサンする事が出来ます（能力的）、しかし今は残念ながら出来ません（実際的）、何故ならイタリア語を勉強しなければなり

ません。

このような会話を二人一組、もしくは学生の数によっては小人数のグループに分かれて少しずつその内容を変えながら行う。このようなはっきりとしたテーマを持つ、短いインタビュー形式の演習は学生同士がお互いをより良く知り合える機会ともなり、自然に学生全体をその日の授業内容へと導くようになる。通常5分から10分程度、各クラスのレベルに合わせてそれを行い、終了すると、次は一人ずつ、自分のグループから立ち上がり、勇気を出して他の仲間（グループ）に対し自分の仲間（グループ）の好みや性格、習慣等をイタリア語で発表して行く。それはこの授業において初めて学んだ動詞の活用変化の、人称を変えた会話練習となる。そして前回の授業内容についての復習の後、5分間程度の筆記による単語小テストを行う。それは教科書各課に登場する単語を問うものであり通常、教科書の一つの課を終えるのに二回から三回分の授業を充てる事から、それぞれの課において同じ内容の小テストを繰り返し行う事となる。その目的とは、学生達が一つの課の単語を毎回少なくとも60%以上覚えるようにする為であり（通常、それぞれの課には20～30の単語が登場する）、これにより学生達は毎学期の終わりには、イタリア語会話の基礎となる、ある一定数の語彙を持つ事となるからだ。そして普段、筆者は教室内で余り日本語を使い過ぎないように気を付けている。すると学生達は恒常的にヒアリングに集中し、その内容を理解するように努め、筆者が言った事ばかりでなく教科書や練習問題の文章までも各自で、或いはグループで考えるようになるからである。次に単語の小テストの後、我々は声を出しての教科書の読みとその内容の理解（長文読解）へと進む。一つの長文の読みは毎回、最低2回程度行う。イタリア語の発音とスペルは基本的にローマ字読みがベースなので、それに慣れてしまえば同じように絶えず母音で終わる言語を持つ日本人学生達にとっては容易である。しかし問題なのは、それぞれの単語のどの母音にアクセントを置き又、文章全体をどのような抑揚（イントネーション）で発音するのが難しいと言えるだろう（何故ならイタリア語はとても音楽的な抑揚を持つからである）。それはレベルが上達した学生でも、やはり正しい発音や抑揚、そして連続する単語の適切

な言い方(リエゾン)、時にはジェスチャーなどが不十分で言いたい事が伝わらない場合があるのでそれらを随時、指導して行く。そして長文読解が終わると次は各文法事項へと向かう。最初にその用法と活用変化の規則についてを解説し、次にいくつかの練習問題を通して理解させて行く。そして定期試験問題には余り多く出さないような、少し踏み込んだ内容の文法事項にも触れ、学生達にイタリア語を勉強しているという自信や自覚(専門性)を持たせる事と、一層勉強したい学生やイタリア語検定を受けたいという学生達の要望にも応えて行く。そして授業の終わりには最初に行ったダイアログを再び用い毎回、何を学んだのかを再確認させる。やはり複言語の科目である事からイタリア語に関してより多くの事を説明しようとしても少し時間が足りないように思う時もあるが、筆者はイタリア語学習の基本となる基礎文法事項を、まずはしっかりと学生達に理解させる事とその実践的な応用会話をより多く行う事に努め、日本語からの翻訳ではなくイタリア語で考え、話す事に慣れさせると同時にその文法上の複雑さからも来るイタリア語本来の美しさも大切にする為、やはり毎回10分程度、踏み込んだ内容の文法事項の解説をする事(発展)も大切であると考えてる。

第二章 複言語プログラムにおけるイタリア語各クラスの授業内容と解説の要点

初級クラスはイタリア語に慣れ、動詞の直説法・現在までの文法事項を習得する事、そして中級クラスは複合時制の仕組みの理解から始まり、接続法以外の全ての基礎文法事項を習得する事をそれぞれの内容範囲とする。又、桑原恒和担当の上級クラスにおいては接続法・現在・過去・半過去・大過去と仮定文の学習と同時に、それ以前の文法事項の復習をその内容範囲とする。

(1) 初級クラス

イタリア語初級クラス1期はイタリア語のアルファベットと発音の解説から始まり、名詞の性(男性か女性、そして中性が無い事)と数(単数と複数)の説明を行い、特に単数から複数への語尾変化が不規則なもの(例えば単数の語尾が-coや-goで終わる男性名詞は複数では-ciや-chi、-giや-ghiとなる事

など)や無変化(単複同形)なものとして、それは外国語(フランス語、英語、ドイツ語など)を由来とする単語や、語尾の母音にアクセント記号を持つものなどを指し、イタリア語を学び始めたばかりの学生達が混乱しないよう、細心の注意を払ってこの規則変化と不規則変化を解説し、次の文法事項である冠詞へと向かう。それは定冠詞と不定冠詞そして部分冠詞(数のはっきりしない“いくらかの～”や“いくつかの～”の意)までを理解させる事であり、この箇所においては比較的時間を多めに取り、それを主に練習問題に当て、学生達を冠詞に続く名詞(或いは名詞に先行する形容詞)のイニシャルによって、当てはまる冠詞を自動的に選び出せるようにするが、上記の冠詞をそれぞれいつ、どのように使い分けるのかをしっかりと理解させる事が肝心である(冠詞を省く無冠詞の用法もここで解説する)。冠詞の後は名詞の性と数を理解した上でそのそれに合わせた形容詞の規則的な語尾変化と不規則な語尾変化(ここでも単数の語尾が-coや-goで終わる形容詞や無変化のもの等)を解説する。この段階において、ここまでの基礎文法の地固めをするような作文を多く行い、大体1期が始まって一ヵ月程度が経つ頃、初めて動詞の活用変化(直接法・現在)を学ぶ。それは不規則で固有の変化を持つ、三つの重要な動詞 *essere* (～である、どこそこに居る)、*avere* (～を持つ)、*fare* (～をする)から始め、学生達はこれらの動詞の活用変化を何度も声に出しながら音からも学ぶ事によって、自己紹介等の会話演習において少しずつ長い文章で話す事が出来るようになる。例えば最初に私の自己紹介の例文を黒板に書いた後、次に学生達各自の紹介文をノートに書かせ、一人ずつ皆の前で立ち上がりそれを読みあげたり、暗記して発表したりする演習では、まずは挨拶から始まり、名前を言い、出身地、国籍(～人であるという事)、職業(身分)の他、“今、～に居る”や年齢を言い、今の気分はどうであるか(楽しい、悲しい、元気だ、疲れている等)などを言う内容となる。この自己紹介において授業で学んだ職業名詞や国籍を表す形容詞も活用し、そしてイタリア語に多く存在し、文章の意味を変える前置詞についても学ぶ事になる。例えば *Sono di Nagoya.* (私は名古屋の出身です)と *Sono a Nagoya.* (私は名古屋に居る)から前置詞 *di* と *a* の違いを理解させる事となる。先述の三つの動

詞の後は、不定詞の語尾が **-are** で終わる **-are** 動詞の規則的な活用変化を学び、その派生形で不規則な変化を持つ、語尾が **-iare, -care, -gare** の動詞の解説へと進む。そして次に **-ere** 動詞の変化を学んだ後、最後に二つの違う活用変化のグループへと分けられる **-ire** 動詞の解説へと向かう。学生達は以上の動詞の活用変化をやはり大きな声を出しながら音から学ぶと同時に、多くの練習問題や作文を通してそのスペルからも学び、応用会話を行いつつ最終的には活用変化した動詞だけで、当てはまる主語人称代名詞までも分かるようになる。この1期においては所有詞（形容詞と代名詞）と親族名詞、ものの配置を表すような前置詞についても学び、そこでの会話演習例としては家族について話したり、ものがどこにあるのかを教えたり、尋ねたりするような内容となり、少しずつ前置詞＋定冠詞の組み合わせである冠詞前置詞の学習も始める。そして学期の最後の定期試験において、Vunduk 桑原 Anastazija は口頭試問（インタビュー）を行い同じ学生による桑原恒和担当クラスの方は筆記試験を行う。その口頭試問とは学生一人ずつ筆者の前へ出て、前もって提示されたテーマについて各自が用意した回答をイタリア語で話し、質問にも答えた上、最後に教科書内の長文を正しい発音と抑揚で読む事を確認するものとなる。学生達はその試験において最初是一对一で筆者の前に居る事から戸惑い緊張しているが、毎回その終わりに、筆者は彼ら一人々々に握手の手を差し伸べ、学期の終わりをおめでとうと祝福する。それは筆者と学生達との間に、より多くの親近感と信頼関係をもたらし、これらを保ったまま2期へと共に向かう事が出来るようになるからである。

イタリア語初級クラス2期からは、特に動詞の活用変化（規則変化や不規則変化）の学習量が一段と増し、その中でも多くの動詞が前置詞と共に覚える事を指摘する。例えばそれは学生達に地図を伴う、動詞＋前置詞＋場所（名詞）あるいは動詞＋冠詞前置詞＋場所（名詞）の例文が記載されている資料を配り、動詞 **andare**（行く、話している相手から遠ざかる、話している相手とは別の方向へ行く）、**venire**（来る、話している相手に近づく、前置詞 **con** と共に相手と合流する、一緒の方向へ行く）、**uscire**（出る、外出する）、

partire (出発する)などの動詞を用いて特定の場所から、特定の場所への移動を言ったり、道を尋ねたりする等の会話演習を行い、各グループにその行程の伝え方を地図と共に考えさせ、次に教室全体に向けてそれをイタリア語で発表し、残りのグループがそれを確認し、質問するという作業を、役割や出発点、目的地を代えて繰り返し行う内容となり、学生達に動詞+前置詞+名詞もしくは動詞+冠詞前置詞+名詞の組み合わせを理解させる。又、この学期において欠かせない文法事項の一つとして指示詞(代名詞と形容詞)の学習があり、特に指示形容詞 *quello* (名詞に先行し、場所的に、時間的に遠いものや人を指す“あの～、その～”の意)の語尾変化だけが定冠詞型である事(他に形容詞 *bello* “美しい、素敵～”もやはり同じ定冠詞型の語尾変化なのに対して形容詞 *buono* “美味しい、性格の良い～”は不定冠詞型の語尾変化を持つ事もここで紹介する)も応用会話や練習問題を通してしっかりと身に付けさせる。そして次に我々は時刻について、それを数詞・基数の復習と共に学ぶ事となる。それは“何時です”と時刻を言ったり、尋ねたり、“何時に”や“何時から”という言い方までを学ぶ事からお店の営業時間や乗物の時刻、一日の予定等を言う会話演習へと幅が広がり、授業はより活気を帯びて来る。次に補助動詞(もしくは従属動詞) *dovere* (ねばならない)、*potere* (“实际的に”～出来る)、*volere* (～したい)、*sapere* (～する術を知っている事から“能力的に”～出来る)の学習においては、補助動詞+主動詞の時、その主動詞は絶えず不定詞(動詞の原形)である事から、補助動詞のみを活用変化させるだけで済み、補助動詞と主動詞の間には前置詞も要らないのでその使い方は慣れれば容易であり、この補助動詞の用法を学ぶ事により学生達の会話能力は一気に伸びるようにいつも感じている。そして補助動詞の後是非人称動詞 *piacere* (～を好む)、*interessare* (～に興味を持つ)、*servire* (～が必要である)、*mancare* (～が欠けている)、*sembrare* (～のように見える、思う)等を学ぶが、日常でよく使われる非人称動詞はそれ程多い訳ではないのでそれら全てを黒板に書き出し、学生達に知ってもらうようにする。そしてこの非人称動詞はここまで学んで来た他の動詞のように、主語人称代名詞に合わせて活用変化する訳ではなく(その事から非人称と呼ばれる)、その対

象（＝主語）となる名詞が単数か複数、あるいは動詞に合わせて活用変化する点がその特徴であり、それは動作主とは関係無く、対象が名詞の単数や動詞（一つでも、それ以上でも）の場合は先行する非人称動詞は三人称単数の型となり、名詞の複数の場合は三人称複数の型を取る点を解説する。

Mi piace la pizza. 私はピッツァ（名詞・単数）が好きだ。

Mi piace mangiare e cucinare. 私は食べる事（動詞）と料理する事（動詞）が好きだ。

Mi piacciono gli spaghetti. 私はスパゲッティ（名詞・複数）が好きだ。

又、このように非人称動詞の動作主を主語人称代名詞では表さず、必ず“誰々に～、誰々にとって”の意味である間接目的語人称代名詞（間接補語）によって表す事から、この箇所において間接補語の解説と同時に、その違いを理解させる為、直接補語（誰々を、何々を～の意）の解説も行い、そしてその発展として、よく難解だと言われる箇所である“誰々に＋何々を～”の意味で使う間接補語＋直接補語による代名詞の結合形も紹介する。ここでは結合形である時とそうでない時の代名詞gliについて、間接補語では“彼に、彼らに、彼女らに”の意味であるのに対し、結合形になった途端“彼女に～を、あなたに～を”の意味も加わる事が解説の要点となる。又、イタリア語でたびたび登場する代名小詞ciとneの解説も省く事は出来ない。それぞれが実に様々な意味を持つ事から、分かり易くまとめてある洋書の教材（Qui Italia）を用い、丁寧に解説する為には授業一回分をその解説に充てる場合もある。そして最後に日本語では“誰々に～”（間接補語）を使う所を、イタリア語では“誰々を～”（直接補語）を使う、日本語とイタリア語との変換が要注意ないくつかの動詞を解説する。それはringraziare（“誰々に感謝する”が“誰々を～”になる）、salutare（“誰々に挨拶する”が“誰々を～”になる）、chiamare（“誰々を呼ぶ”では良いが“誰々に電話する”の意味ではやはり“誰々を～”となる）の他、つつい日本語的には前置詞con（～と）を付けたくなるような動詞sposare（“誰々と”ではなく“誰々を結婚する”となる）も学び、特に“電話する”という意味で使う以下の二つの動詞については、英語のto telephoneに当たるtelefonareでは日本語と同じように間接補語（誰々

に～)を使い、to callにあたる先述の chiamare では直接補語(誰々を～)を用いる点を、先述の要注意な動詞の一群と共によりしっかりと把握させ、検定等の試験問題にも備えさせる。

(2) 中級クラス

イタリア語中級クラス1期においては、初級クラスと比べて留学等の理由により学生の数は減少する。その事から授業の雰囲気としては高度な内容を学習しながらもより落ち着いたものとなり、学生一人に対してより多くの時間で会話演習が出来るようになる。その最初の授業においては、まず初級クラスで学んだ文法事項(動詞の直説法・現在の規則、不規則変化まで)の中から特に重要な箇所を復習し、その後、初めて学ぶ複合時制(助動詞 avere もしくは essere + 過去分詞で構なされる)である直説法・近過去へと進む。これはスペイン語においては点過去形と呼ばれるもので、話者の現在の生活に関りを持つ、完了した事がはっきりとした過去の動作であり、その日本語訳において筆者は“食べました”、“飲みました”の語尾の“た”の部分強く発音し、その動作が完了したという事を強調して学生達に印象付けさせる。又、その近過去形の特徴を遠過去形(話者の現在の生活には関係の無い、完了した過去の動作。例えば昔話や歴史上の出来事について述べる時などに使う)や半過去形(スペイン語では線過去形と呼ばれ、ある時点において完了していない途中の動作や、かつて習慣的に繰り返された動作)との性質の違いを紹介しつつ、それぞれの役割を理解させる。この近過去形の学習はイタリア語学習において、最も時間を割いて丁寧に行う。と言うのはこの時点でそれぞれの動詞が取る助動詞が essere と avere のどちらであるのか、或いはその両方であるのかを知る事と、それぞれの動詞の過去分詞を知る事がその目的となり、この箇所ですでに覚えた文法事項は今後、イタリア語学習を終えるまでに学ぶ全ての複合時制(先立未来、大過去形、複合条件法、前過去形、接続法・過去と接続法・大過去、そして助動詞の選択だけで挙げるならジェルンディオ過去も含む)においても一切変わらない法則だからである。その為、筆者は学生達がこの近過去形を学ぶ段階に入る事を、イタリア語学習の成人

式あるいはイタリア語文法全体を見渡せる位置にある主要な骨格部分に到達したとも紹介する。この箇所での解説の要点となるのは主に移動やある場所における状態を表す動詞が自動詞として助動詞は *essere* を取りながらも（学生達は重点的にこれらの助動詞 *essere* を取る自動詞をリストから覚える）、同じ自動詞である *piangere*（泣く）、*camminare*（歩く）、*lavorare*（働く）などはその動詞単独でも（起点や終点、方向などを伴わなくても）使用出来る事から他動詞のように助動詞は *avere* を取る点を解説する事が重要である。そして助動詞 *avere* を取る他動詞に関する説明に関しては、それは補語（“誰々に～”の間接補語や“何々を～、誰々を～”の直接補語）を伴う事が出来る動詞として紹介するが、まずは先述の通り、助動詞 *essere* を取る自動詞だけをリストから覚え、その他大勢にあたる動詞は大雑把に助動詞 *avere* を取る動詞であると考えても良いとも解説する。又、動詞によってはその助動詞 *essere* も *avere* も取るものもあり、例えば動詞 *passare* の場合は、主な五つの訳それぞれで助動詞 *essere*（通り過ぎる、寄る、時間が経つ）と *avere*（渡す、過ぎす）に分かれる事や、動詞 *correre* のように助動詞 *avere* の場合、その意味は“走る”となり、*essere* の場合は“急ぐ”となる事、動詞 *vivere*（生きる、生活する）や天候を言う本来の意味での非人称動詞の場合は助動詞は *avere* でも *essere* でも良い点なども指摘し、これらの解説も検定等に向けたプラス α な内容と考える。その上、過去分詞には規則的もの（-are 動詞は -ato、-ere 動詞は -uto、-ire 動詞は -ito）だけでなく、実に多くの不規則のものがあるが、その多くは形容詞と同形であったり、語尾の違いはあっても名詞と同形であるという点を説明しつつ、丁寧に時間を掛けながら学習させて行く。次に直接代名詞 *lo, la, li, le*（その名詞の質を表す）+ 近過去形、部分代名詞 *ne*（その名詞の量を表す）+ 近過去形の構文を学び、その法則も以降に学ぶ全ての複合時制との組み合わせにおいても当てはまるものであり、それは直接代名詞の単数 *lo* と *la* の語尾の母音（*o* と *a*）は助動詞 *avere* の最初の母音の音の前では消えてアポストロフィが付くのに対し、複数 *li* と *le* の語尾の母音（*i* と *e*）は消えない事や部分代名詞 *ne* の場合でもその語尾の *e* とは関係なく、過去分詞の語尾が代名（言及）する名詞の性と数（*o* と *i* と *a* と *e*）に合わせる事などを

例文と練習問題等でしっかりと理解させる。

Quel libro l'ho letto ieri. 私はその本（男性名詞・単数 = lo → l'）を昨日読んだ。

Maria l'ho vista stamattina. 私はマリーア（女性名詞 = la → l'）を今朝、見かけた。

Quei libri li ho letti ieri. 私はそれらの本（男性名詞・複数 = li はそのまま）を昨日読んだ。

Maria e Chiara le ho viste stamattina. 私はマリーアとキアラ（女性名詞・複数 = le もそのまま）を今朝、見かけた。

Il vino ne ho bevuto solo un bicchiere. 私はそのワイン（男性名詞・ワインの量を表す = ne）をたった一杯だけ飲んだ。

又、近過去形における非人称動詞（助動詞は *essere*）、再帰動詞（助動詞は *essere*）、補助動詞（単独では助動詞は *avere*、+ 主動詞の場合は、主動詞に合わせて助動詞は *essere* にも *avere* にもなる事）そして補助動詞 + 再帰動詞（再帰代名詞の位置によって助動詞は *essere* も *avere* も取る事）についても丁寧な解説と例文を通してそれぞれの法則を理解させなければならない。そして次に未来形の単純未来と複合未来（先立未来）へと進む。この箇所での面白い点とは、ここまで学んで来た文法事項のような言い切る、断言する文章ばかりでなく、やっと思測などが言えるようになるという事だ。にもかかわらず、自分の行為に対して未来形を使った場合は、日本語の訳では同じになってしまう条件法の例文と比べ、それは宣言するような、話者の強い意思をも表す事を紹介する。例えばそれは

Ti amerò per sempre.（私は君を永遠に愛する）や Con te partirò.（私は君と一緒に旅立つ）などであり、もう一つの面白い点は複合未来形が未来と言いながらも過去の行為の憶測にも使えるという点である。例えば

A quest'ora Sofia sarà tornata a casa.（この時間、ソフィアは家に帰ったであろう）となる事である。

イタリア語中級クラス2期のスタートはやはり1期の復習から始まり、次に

条件法へと向かう。それは主に実現可能な願望を言う場合や物事を丁寧に頼む時に使う単純条件法（もしくは条件法・現在）と実現不可能な願望を言う場合や動作の結末が不明な過去未来、物事を丁寧に断る（婉曲表現）等を使う複合条件法（もしくは条件法・過去）を学ぶ事である（それらを学生は桑原恒和が担当するイタリア語上級クラスにおいても接続詞 *se* を使う仮定文において、或いは接続詞 *che* 以前の主節で用いられ、*che* 以下の従属節における接続法・半過去や大過去と共に学び直し、それらの文章からその用法を改めて学生達に実感させる事となる）。そして上記の条件法どちらも憶測や仮定を言う場面などにも使う事を理解させる。ここでも条件法・現在と1期で学んだ直説法・未来との話す内容の確実性の違いについてを解説し、物事を頼む場面での会話演習においては直説法・現在で話す相手に対してぶっきらぼうな、命令調のような印象を与えるのに対して、この条件法では話す相手に断る間を与えるような、語調緩和のセンスを持つ事を学生達に伝え、日本語の謙譲のような、柔らかい言い方に相当し、イタリア語における最も丁寧な言い方であるとも紹介する（しかしどの場面においても使えるというのではなく、普遍的もしくは確実な事を言う場合や話者の強い意思を伝えたりする場合にはやはり直説法・現在を使う事もここで解説する）。このレベルの会話演習になると、筆者はそれを小劇場と呼べる程、願望や憶測を言う他に、仮定する、丁寧に物事を頼む、他人にアドバイスを与えるというように学生達の会話のバリエーションがぐんと増え、学生自身のオリジナリティも出せるようになる事と、役割の設定も複雑になり、言葉だけでなく、感情までも伴って演習出来る事から、筆者はその文章全体の抑揚や然るべきジェスチャー等を細かく指導する事となる。そしてこの時点を過ぎると学生達は、イタリア語で話す事に自信と勇気を持つようになってきているものである。そして条件法の次は直説法・半過去とその複合時制である大過去形へと向かう（それは文中において過去の動作が現在から見て二段階となる場合、この大過去形は近過去形、半過去形、時には遠過去形と共に用いられ、これらの時制の動詞以前の過去の動作を表し、もし大過去形単独で用いられる場合は誰がどう見ても昔の話、つまり周知の事実としての過去の動作として用いら

れる)。この段階における直説法・近過去と半過去の違いについての解説としては、近過去形は動作が確実に完了している事からその行為があったという事実を伝えるものであるのに対して、半過去形はある時点において動作が完了していない、途中だったと言う状態こそを伝えるものであるという点を理解させる事となるが、一般的にはその使い分けが難しいと言われる箇所でもある。その為、授業においては図式を伴った丁寧な解説と多くの例文を提示してその構造を解説する。それは恐らくイタリア語学習において最もドラマチックな箇所であり、この文法事項を時間をかけて、納得のいくまで学べるという環境はとても貴重なものと時間の限られた社会人に教える講座も多く持つ筆者は実感している。次に理由や原因、同時進行などを表すジェルンディオ・現在と過去についてと、動作の進行形“～している最中”を表す(動詞 stare + -ando,-endo) やその動作に移る手前“～しかかっている”を表す(動詞 stare + 前置詞 per + 不定詞) という二つの文法事項を学んだ後、命令法へと進む。それは三人称単数・複数の活用変化を持つ間接命令法とそれ以外の人称による直接命令法についてと、“～してはいけない”などの否定の命令を理解する事であり、その要点としては間接命令法の三人称単数の活用変化の型がやはり桑原恒和が担当するイタリア語上級クラスで学ぶ、主に主観的な意見を述べる等の文において、接続詞 **che** 以下の従属節で使われる接続法・現在の一人称単数から三人称単数までの活用変化の型と同形である事から、学生達を特にその活用変化に慣れさせるようにする事と、特定の動詞の不規則な活用変化(例えば二人称単数で動詞 **andare** は *va'*、**dare** は *da'* となる事など)、そしてその不規則な活用変化+代名詞においては、その代名詞のイニシャルである子音が二重になる事などを指摘する。例えば **Vacci!** 君、そこ (*ci*) へ行け! や **Dammi!** 君、私に (*mi*) 頂戴! などの多くの例文を紹介し、音からも、スペルからもそれに慣れさせるようにする事である。又、見落としがちな再帰動詞における命令法の活用変化も日常生活でよく使われる動詞による例文と応用会話を通して自然に身に付けるようにする。そして最後に直説法・遠過去と比較級(優等・同等・劣等比較、絶対最上級と相対最上級)、様々な関係代名詞(前置詞 + *cui* や定冠詞 + *quale* 等)の用法につい

てを学び、定期試験となる。

まとめ

筆者が名古屋外国語大学で担当する複言語プログラム・イタリア語初級と中級クラスは以上のような流れで合計2年間の課程を進めていく。そして筆者は授業担当者として中級クラスⅡ期の最後の授業の終わり30分間を、学生達が筆者に対しイタリア語で質問する時間としている。質問の内容は学生達に自由に設定させている。例えばイタリア語の学習に関する事でも、個人的な問題に対してのアドバイスを請うでも構わない、質問される筆者は時には赤面したり、答えに苦慮する事もあるが、こうした機会を設ける事によって普段の授業とは立場が逆転し、学生達とより一層の信頼関係が築ける事を筆者はいつも実感している。